

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 28 日現在

機関番号：84302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25871230

研究課題名（和文）近代美術工芸における「図案」と「図案家」をめぐる基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research on Zuan (design) and Zuan artists in modern arts and crafts

研究代表者

中尾 優衣 (Nakao, Yui)

独立行政法人国立美術館京都国立近代美術館・学芸課・研究員

研究者番号：00443466

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：図案は、いわゆる「工芸」と「デザイン」の両分野で研究対象とされてきたが、それぞれの分野における図案の意義や位置づけが異なるため、これまで包括的な研究は少なかった。本研究は、近代の図案および図案家について同時代の文献資料から関連事項を抽出・データベース化することで、当時の図案界の状況を俯瞰的にとらえ、今後の研究基盤の充実に図った。とりわけ美術と産業が密接に結びついて発展してきた近代の京都における動向に焦点をあてて考察することで、工芸品への図案の応用過程における図案家の役割をいくつかの具体例に即しつつ検証し、図案の重要性が当時の美術工芸界において広く共有されていたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Zuan has been examined from both “crafts” and “design” perspectives for long time. However, its role and how it is positioned in these fields are different from each other, and there are few comprehensive studies of Zuan. This research aims to form a foundation for future research by making a database of materials and documents about modern Zuan and Zuan makers. This research reveals that the significance of Zuan was widely acknowledged within the art and craft world by discussing the unique circumstances of Kyoto in modern times where art and industry had a strong link, and examining relationships between Zuan artists/makers and craftsmen in regard to the application of Zuan.

研究分野：工芸史

キーワード：図案 図案家 近代デザイン 近代工芸 美術史 産業美術 京都 データベース

1. 研究開始当初の背景

図案に関する研究は、1990年頃から盛んに行われるようになり、目覚ましい成果をみせている。これまでの研究において、図案は主にデザイン史と工芸史の両分野にわたりその対象となっており、デザイン史研究では、日本の近代デザインに関する貴重な基本文献の復刻およびそれに基づく個別研究が相次いでいる。一方、工芸史研究においては、工芸品製作の際に下図あるいは参考図とすることを主目的として発行されたいわゆる「図案集」に関する研究が進められ、『温知図録』に見られるような万国博覧会に向けた日本政府の国家的文化戦略との関わりや、あるいは大正期に出版された木版印刷を主とした大量の図案集の存在が示すような、美術におけるメディアの一樣相としての工芸図案の重要性が指摘されている。

近代以降、「図案」や「図案家」という言葉は、様々な社会的、文化的背景の中でその役割と意味を緩やかに変化させながら、きわめて多様な文脈で用いられてきた。しかし従来の研究においては、そのこと自体が近代以降の「図案」概念の広がりと同様性を示すものとして肯定的に捉えられており、その多様性がいかなる背景や理由によるのか、そしてどのように変化してきたのか、という点について考察の対象とされることは少なかった。

従来の工芸史において研究対象とされるのは、あくまで実作品である工芸品への応用を目的とした図案であり、明治初期の「図案」誕生当初の概念にきわめて近い。これに対して、近代デザイン史研究における図案は、広告などの平面のグラフィック作品を中心に、建築や室内装飾、家具なども含む、より広い意味でのデザインを示す言葉としても用いられる。工芸史とデザイン史のそれぞれの文脈において、「図案」と呼ばれているものが果たして同じものなのか、またその意味内容にどのような変遷がみられるのかという点は、図案研究の前提として検証しておくべき課題である。つまり、「図案」をめぐって生じる諸問題こそ、日本における図案受容の特質を考える上で、きわめて重要な意味を持つのではないかと考えるにいたった。

2. 研究の目的

明治後期以降の商業デザインに関わる図案家の登場は、工芸史研究では「工芸からの図案の自立」、デザイン史研究の側では「明治以来の図案の拡張」と解釈されている。

本研究は、工芸史とデザイン史という両分野のはざまで見過ごされがちであった日本での「図案」概念の萌芽期に着目し、当時の図案家を取り巻く諸相を多角的に検証し、丁寧に解き明かしていくことで、従来の研究の枠組みにとらわれず、図案研究の新たな視座

を得ることを目的としている。

そこで本研究では、

(1) 図案と図案家に関する当時の言説のデータ収集と分析

(2) 図案家に関する基本的事項の収集および図案家の役割に関する考察

この2点に関する情報の蓄積を行うこととする。当時の美術雑誌等の文献資料調査と関係者からの聞き取り調査を並行して行い、近代の図案と図案家に関するデータベースを作成し、今後の研究基盤の充実に図る。

なお、このデータベースはそれ自体を将来的な研究に活用することも目指しているが、データベースの完成や精度の向上のみを到達課題とは考えていない。本研究では関西圏に集中したデータ収集を行うという計画のため、新知見を得られる可能性が高い半面、データ量に地域差の生じる可能性が当初から想定されたからである。

本研究の第一の目的は、データベースの作成に伴い、一つのプラットフォーム上にさまざまな情報をいったん集めることによって、データの重複や偏りを俯瞰的に見ること、その分析を通して、これまで注目されなかった地域や人物をめぐる人々の関係性、図案観の変遷といった個別の事例について、深く考察するための指針を得ることである。

3. 研究の方法

まず、本研究で対象とする明治期から昭和にかけての美術工芸雑誌や美術新聞など、一般に流通していた印刷物を中心に、ひろく文献の書誌情報を調査する。これらの文献の中から、時代、地域、分野、著者および発行者等から図案との関連度が高いと思われる文献をさらに選び出し、図案に関連する基本事項および言説、具体的な図版の収集を進める。

また文献調査で得られた情報を活用しつつ、近代の図案に関わりの深い関係者への聞き取り調査も同時に行う。文献資料の調査と聞き取り調査を両輪として、そこで得られた成果を効率的に活用するためのデータベースの設計を行い、実作品の比較研究に適用する。

この作業においては、工芸史、デザイン史の分野で蓄積されてきた先行研究の成果、とりわけ森仁史氏監修による『叢書・近代日本のデザイン』シリーズ(ゆまに書房、2007年~)や、樋田豊次郎氏、横溝廣子氏の編集による『明治・大正図案集の研究 近代にいかされた江戸のデザイン』(国書刊行会、2004年)などを参照することで、膨大な近代の文献資料から必要な文献を選定する際の見通しを立てることができると考える。

しかし、美術と産業が密接に結びついて発展してきた近代の京都の動向について、ごく一部の個別研究を除いては従来の研究で言及されることが少なかった。本研究では、図案研究において京都を中心とする関西圏が重要な地域と考え、京都および関西圏で発行

された雑誌の調査に重点を置くことが特色であり、その視点に基づいて全国的な図案の展開を比較検討することで新たな成果が期待できる。

4. 研究成果

一年目と二年目（平成 25、26 年度）は、図案を専門的に扱った雑誌『図按』、『現代の図案工芸』、『図案と工芸』のほか、『京都図案』、『京都美術協会雑誌』、『日本美術と工芸』、『デザイナー』、『美』、『大阪之工芸』など、京都や大阪で発行された美術雑誌の所在調査および 図案家に関する基本事項のデータ収集、 図案をめぐる言説の収集、 図案に関連する図版の収集作業、というデータベース化の作業を網羅的に行った。特に京都で染織関係者を中心とした図案研究会には若手の漆芸家も参加していたことが文献調査で明らかとなり、研究代表者が所属機関において企画した展覧会および展覧会図録において、その成果の一部を公表した。

二年目は国外に流出した漆器図案の調査を行ったほか、明治期から漆器製造業と染織業に携わっていた複数の関係者から聞き取り調査を行い、所蔵されていた資料の一部もデータベースに反映した。また当該年度に開催されたシンポジウムでは、近代工芸の状況をめぐって工芸やデザインの研究者と活発な討議が行われた。

三年目（平成 27 年度）は文献調査の範囲を広げ、工芸関連の雑誌や当時の図案展覧会および工芸展覧会の資料のほか、『生活と芸術』、『都市と芸術』、『風俗画報』、『建築雑誌』などを対象に継続して調査を行った。さらに、これまでの調査で得られたデータの齟齬を見直し、データベースの構造についても美術館でのデータ管理に従事している専門家の意見を仰いで修正作業を行い、利便化を図った。また京都の漆器商と織物業の所蔵する文献資料、写真資料の調査を行い、工芸製作の実際の場合において図案が活用された具体的な例について考察を進めた。近代の京都の状況については、漆芸と図案の関係性、実作者と漆器商の関係性を文献資料から考察し、論文の形でその成果を公表した。

四年目（平成 28 年度）は、データベースへの反映作業と整備を中心に行った。また美術印刷業の関係者から聞き取り調査と文献調査を行った結果を踏まえ、これまでその活動の全容が検証されていなかった京都の図案家に関する論文を発表した。

本研究の成果は、網羅的なデータ収集によって表れたデータの重複や偏りについて重点的に考察することで、図案イメージの変遷や図案家像の考察へと発展させることができた点にある。とりわけ関西圏の図案家について、産業と深く結び付いて活動していた様子を具体的に浮かび上がらせることができた。また聞き取り調査では、関係者ならではの情報に触れただけでなく、所有されていた

貴重な資料に行きあたるケースが多くあったことも予想以上の成果であった。こうした地道なアプローチによる調査は、事前の計画通りに進展しづらい面もあるが、比較的新しい分野である図案研究にはきわめて有効な方法である。本研究で明らかにできたことはデータベースの成果のごく一部であり、今後も同様の調査をさらに範囲を広げて継続することで、工芸史、デザイン史、さらにはメディア史においても新知見が得られることが期待される。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 2 件)

中尾優衣、雑誌にみる近代京都の漆芸 『日本漆工会雑誌』を中心に、CROSS SECTIONS (京都国立近代美術館研究論集、査読有、Vol. 7、2015、pp. 2-25

中尾優衣、澤田宗山に関する一試論 図案集を手がかりに、CROSS SECTIONS (京都国立近代美術館研究論集、査読有、Vol. 8、2017、pp. 2-23

〔学会発表〕(計 2 件)

中尾優衣、うるしの近代、「うるしの近代 京都、工芸 前夜から」展記念講演会、2014 年 8 月 16 日、京都国立近代美術館

中尾優衣、近代京都の漆芸 京都高等工芸学校とその周辺から、シンポジウム「加賀と京都の漆芸 変革期における工芸教育」、2014 年 10 月 13 日、金沢美術工芸大学

〔図書〕(計 1 件)

中尾優衣ほか(共著)、京都国立近代美術館、『うるしの近代 京都、工芸 前夜から』、2014、pp. 8-15

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

中尾 優衣 (NAKAO, Yui)

独立行政法人国立美術館京都国立近代美
術館・学芸課・研究員

研究者番号：00443466